

令和元年6月25日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04122

研究課題名(和文) 妄想的な加害感の生起メカニズムに関する特性論的研究

研究課題名(英文) Psychological Traits predicting the conviction of offensive cognition

研究代表者

佐々木 淳 (Sasaki, Jun)

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：00506305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：加害感とは「他者に不快感を与えている」と事実と反して悩む症状であり、時に強い確信を伴う。本研究は、加害感の確信の度合いがどのような心理的特性によって生じるのかを明らかにすることが目的であった。本研究の結果、思考を統制しなければならないと考えていたり、思考を危険なものと考えている人ほど、加害感の確信の度合いが高まることが明らかになった。想定されたschizotypyの特性の関与については明確でなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

加害感とは社交不安の一群の症状であるが、他の人から否定的な評価を受ける恐れについての側面に主に注目が集まる一方、他の人をいやな気持ちにさせてしまうことへの恐れについては、症例研究が主で実証的研究がほとんどなかった。本研究は、加害感に関する数少ない実証研究であるとともに、確信の度合いがなぜ高まるのかを明らかにしようとしている。確信の度合いを低減させる方法の方向性を考える際の一助となると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the psychological traits predicting the conviction of offensive cognition. This research shows that the metacognitions of "uncontrollability and danger" and "need to control thoughts" enhances the conviction of offensive cognition.

研究分野：臨床心理学

キーワード：加害感 メタ認知 妄想 schizotypy 対人恐怖症

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

加害感とは「他者に不快感を与えている」と事実と反して妄想的に悩む症状であり、日本に特有の「文化依存症候群」とされることが多かった (e.g., Prince, 1993). 妄想性を呈すると、対人コミュニケーションの質が低下し、患者の社会的機能が非常に阻害されるため、妄想的な加害感が生起するメカニズムを解明し、治療法を開発する必要がある。しかし、先行研究は主に文化的論考に留まり、治療法の確立には至っていない。さらに、その妄想的な特徴から、統合失調症との異同に不明な点が多く、治療法が混乱しているのが実情である。近年は欧米でも加害感の症例が報告されるばかりでなく (Clarvit et al., 1996 など)、最新版国際的診断基準 DSM-5 (APA, 2013) では、社交不安症の診断基準にこの加害感が採録された。よって、今後発展を遂げる研究領域であるといえる。

2012-2014 年実施の若手研究 (B) は、妄想的な加害感の生起メカニズムについての検討を行った。大学生 214 名に対して、1) Social Anxiety-Discomfort to Others Scale (SA-DOS; Rector et al., 2006) の日本語版 (佐々木, 2009) を実施した。全 26 項目について、頻度、苦痛度および確信度の 3 つの次元から 5 件法で回答を求めた。次いで、2) 不確実な対人場面における他者の本心についての反すう尺度 (津田, 2011; 「反すう」「反すうの切り替え」の 2 つの下位尺度)、3) 不快な考えが浮かんだ時の対処方略を尋ねる Thought Control Questionnaire 日本語版 (山田・辻, 2007; 「気晴らし」「罰」「再評価」「心配」「社会的コントロール」の 5 つの下位尺度)、4) 観念の認知的コントロール傾向を測定する Metacognitions Questionnaire 日本語版 (山田・辻, 2007; 「認知能力への自信のなさ」「心配に対するポジティブな信念」「認知的自己意識」「思考統制の必要性に関する信念」「思考の統制不能と危機に関するネガティブな信念」の 5 つの下位尺度) を実施した。

その結果、健全な大学生でも加害感体験されていること、および加害感体験は苦痛や確信を伴いやすいことが明らかになった。また、加害観念と反すうの相関係数から、繰り返し考えることが加害観念の体験を増加させるものの、苦痛や確信を強めていないことが示唆された。よって、反すうは観念の質よりむしろ観念自体の量を増加させる働きを持っていると考えられた。そして、加害観念をなんとか抑えなければならぬと考えていたり、加害的な思考が統制できない、と捉えている人ほど確信度が強まっていることが明らかになった。よって確信度が高まる背景には、加害観念に対する認知的なコントロールに関する態度やその方法が関連していると考えられた。

### 2. 研究の目的

本研究課題では、加害感の確信度を高める特性的な要因を探索することを目的とした。具体的には、妄想を呈することの多い統合失調症には病前性格 (Schizotypy) が指摘されているため (Raine, 1991)、この要因とメタ認知の特徴によって加害感の確信度が高まることを想定した。

不安症に関する従来の症状生起メカニズム研究では、症状の頻度 (症状の有無) のみを測定する場合が多く、症状体験のされ方 (e.g., 確信度、苦痛度、心的占有度など) が生じる理由については迫れないという問題点があったと考えられる。そのため、本研究課題でも引き続き多次元アセスメント (e.g., Garety & Hemsley, 1987) の手法を採用し、症状の頻度だけでなく、確信度と苦痛度のアセスメントを行う。

### 3. 研究の方法

分析対象者は一般サンプル 757 名 (男性 368 名、女性 389 名、平均年齢 42.20 歳、年齢 SD=11.99、年齢範囲 18-65) とした。使用した尺度は、下記の通りである。

1) SA-DOS の日本語版 (Rector et al., 2006; 佐々木, 2009) を多次元アセスメントの方法を用いて、頻度・確信度・苦痛度から回答を 5 件法で求めた。

2) 日本語版 Schizotypal Personality Questionnaire Brief 尺度 (SPQ-B; Raine and Benishay, 1995; 伊藤・大部・太田・高尾・坂本, 2008) を実施した。各項目は「はい」か「いいえ」の選択肢によって回答する形式で、「認知・知覚」「対人関係」「解体」の 3 つの下位尺度がある。

3) メタ認知傾向の尺度である Metacognitions Questionnaire (MCQ; Wells & Cartwright-Hatton, 2004; 山田・辻, 2007) を実施した。4 件法での回答であり、「認知能力への自信のなさ」「心配に対するポジティブな信念」「認知的自己意識」「思考統制の必要性に関する信念」「思考の統制不能と危機に関するネガティブな信念」の下位尺度を持っている。

4) 最後に、非臨床群のパラノイアについて検討した Sellers, Emsley, Wells, and Morrison (2018) を参考に、(a) これまでに統合失調症や双極性障害あるいは精神病的な問題 (精神病のあるうつ病など) で、検査や治療のために入院したことはありますか?、(b) これまでに上にあげたような診断を受けたことがありますか?、(c) これまでに幻聴、パラノイア、独特な考えのために服薬を勧められたことはありますか?、(d) これまでに早期発見・早期治療のためのサービスを受けていた時期はありますか? といった 4 項目に回答を求めた。

本研究計画は所属部局の研究倫理委員会において承認されている。多くの年齢層をカバーしたデータが必要となるため、調査会社を利用してサンプルを収集し、回答をもって研究参加の同意とした。項目を読み飛ばして回答することを避けるため、特定の項目には指定された回答肢を選択するように設計した。その結果、1000 名 ((男性 491 名、女性 509 名、平均年齢 41.56 歳、年齢 SD=11.98、年齢範囲 18-65)) のデータを収集した。その後、4) の項目のい

ずれかに該当していたデータおよび一定以上の回答時間がかかったデータ以外を分析対象とした。

#### 4. 研究成果

[本調査への準備] 本調査実施に先立ち、Web による回答には一定の反応バイアスが生じることが明らかとなっているため、研究実施に先立ってその対処法について検討した。次いで、International Congress of Psychology (ICP)が横浜で開催され、「The recent advances in studies on Taijin-kyofusho」と題した招待シンポジウムにて話題提供を行った。研究代表者は「A preliminary study on the psychological factor that enhances the conviction of offensive cognition in Taijin-kyofusho」と題して、上述の若手研究(B)での成果を報告した。本研究でも用いている多次元アセスメントを用いた研究について一定の理解を得ることができた。また、加害感をもつ対人恐怖症に関する研究の動向をまとめ、「生産と技術」誌にて公開した。

[本調査] 上述のサンプルにおいて分析を行った。重篤な精神障害の経験がないとみなされる者であっても、加害感を体験していることが明らかになった。

Schizotypy 傾向とメタ認知傾向を独立変数、加害感の確信度を従属変数とする二要因分散分析を行った。Schizotypy 傾向との間の交互作用を想定していたが、いずれの場合においても交互作用は有意ではなかった。

次いで、加害感の頻度を従属変数、SPQ-B と MCQ の下位尺度を独立変数とした重回帰分析を行った結果、「思考統制の必要性に関する信念」のみが有意な正の関連を示した。また、同じ独立変数のもと、加害感の苦痛度を従属変数とした重回帰分析を行ったが、「思考の統制不能と危機に関するネガティブな信念」のみが有意な正の関連を示した。同様に、加害感の確信度を従属変数とした重回帰分析を行った結果、「思考統制の必要性に関する信念」「思考の統制不能と危機に関するネガティブな信念」が有意な正の関連を示した。

確信度を高める2つのメタ認知傾向が本研究で明らかになったが、2012-2014 年実施の若手研究(B)と符合する結果であった。ただし、いずれの関連においても、標準偏回帰係数が0.2-0.3にとどまるものであったため、今後も検討の必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

##### [雑誌論文](計 5 件)

Adachi, T., Nakae, A., Maruo, T., Shi, K., Maeda, L., Saitoh, Y., Shibata, M., and Sasaki, J. (2019). The relationships between pain catastrophizing subcomponents and core outcome domains in Japanese outpatients with chronic pain: a cross-sectional study. *Pain Practice*, 19, 1, 27-36. doi: 10.1111/papr.12712.

Muranaka, S., & Sasaki, J. (2018). The Effect of Enumeration of Self-relevant Words on Self-focused Attention and Repetitive Negative Thoughts. *Frontiers in Psychology*, 9:819. doi: 10.3389/fpsyg.2018.00819

小川将司・佐々木淳 (2018). 大学生の“キャラ”と自己の在り方をめぐる葛藤過程. *心理臨床学研究*, 35, 6, 573-583.

佐々木淳 (2017). 認知・行動を修正する：認知行動理論. *臨床心理学*, 第17巻第5号, 金剛出版, 673-676.

佐々木淳 (2016). 対人恐怖症の異常心理学. *生産と技術*, 68, 4, 67-69.

##### [学会発表](計 9 件)

宗田卓史・佐々木淳 (2018). 抑うつ症状に対するコーピング・レポートリーの奏功機序の解明：ネットワーク分析による解析. 日本認知・行動療法学会第44回大会(理事会開催)発表論文集.

鈴木孝・佐々木淳 (2018). 心理面接におけるセラピストの自己開示に関する介入方針：クライエントの期待とセラピストの実際の応答との差異から. 日本カウンセリング学会第51回大会(松本大学).

高林伸樹・佐々木淳 (2018). 大学生の睡眠習慣を特徴づける行動とその行動に対する態度：両価性に注目して. 日本認知・行動療法学会第44回大会(理事会開催).

田中和輝・佐々木淳 (2018). 「死後残したいもの」を青年が想起する意義：PAC分析による検討. 日本心理臨床学会第37回大会(大阪大学).

村中誠司・佐々木淳 (2017). 自己注目がネガティブ感情におよぼす影響：線形ベイズモデリングによるリアルタイムな回答と回顧的な回答との比較. 日本心理学会第81回大会(久留米大学).

村中誠司・佐々木淳 (2017). 筆記課題による自我枯渇への誘導：課題の複雑性と制御資源との関連. 日本認知・行動療法学会第43回大会(新潟大学).

Sasaki, J., & Hashimoto, M. (2016, July). A preliminary study on the psychological factor that enhances the conviction of offensive cognition in Taijin-kyofusho. In J. Sasaki & A. G. Ryder (chairs), The recent advances in studies on Taijin-kyofusho. Invited symposium presented at the 31st International Congress

of Psychology (ICP2016), Yokohama, Japan.

Watanabe, M., Sasaki, J., Zhou, B., Kirmayer, J. K., Ryder, G. A. (2016, July). Fear of Offending Others in Japan and Canada: A Mixed-Methods Approach to Taijin Kyofusho. J. Sasaki & A. G. Ryder (chairs), The recent advances in studies on Taijin-kyofusho. Invited symposium presented at the 31st International Congress of Psychology (ICP2016), Yokohama, Japan.

佐々木淳 (2015). マルチメソッド・アプローチに触れて考えたこと：臨床心理学の立場から。日本パーソナリティ心理学会広報委員会 (企画)。心理学におけるマルチメソッド・アプローチ (委員会企画シンポジウム)。日本パーソナリティ心理学会第 24 回大会 (北海道教育大学)。

〔図書〕(計 3 件)

竹田剛・佐々木淳 (2018). 第 4 章「食べる」ことは「こころ」を映す：心理療法から拒食と過食を考える。シリーズ人間科学 1 巻『食べる』, pp79-99. 大阪大学出版会。

Sugiura, Y., Sasaki, J., Sugiura, T., Ito, A., & Tanno, Y. (2015). Appraisals and Control Strategies for Intrusive Thoughts of Failure, Dirt, and Aggression. *Advances in Psychology Research*, 102, 103-116.

佐々木淳 (2015). 対人不安. 森脇愛子・坂本真士 (編), 対人的かわりからみた心の健康. 北樹出版, 48-61.

6 . 研究組織

研究分担者 なし

研究協力者 なし

連携研究者氏名 星野 貴俊

ローマ字氏名：HOSHINO, TAKATOSHI

所属研究機関名：金沢工業大学

部局名：情報フロンティア学部

職名：講師

研究者番号 (8 桁) : 60649284

連携研究者氏名：石垣 琢磨

ローマ字氏名：ISHIGAKI, TAKUMA

所属研究機関名：東京大学

部局名：総合文化研究科

職名：教授

研究者番号 (8 桁) : 70323920

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。